

四十六補遺 陶淵明の詩作と心境の推移

「蝶の雜記帳四十六」でわたしは、陶淵明という人のことを考えて、園田に帰った前後を中心にかの人の生き方に思いを巡らせた。そこでは陶淵明の転機は三十八歳から四十歳にかけての時期にあったとしたが、もう少し長めにとれば、三十九年から四〇五年まで、三十五歳から四十一歳までが転機であった。この期間に、外的状況に刺激され内心の思いが整理され、行動となつて現われた、と見ることができる。淵明の人生を、この転機の期間およびそれ以前と以後の三つの時期に分けて考えれば、それら三つの時期の心境は詩作に表われているだろう。その推移を一つ一つの詩文を味わいながらたどることが、この補遺の目的である。岩波文庫『陶淵明全集』は、それぞれの詩文がいつ作られたかを推定している。それも参照しながら順に考えてみよう。ただし、年代のたしかでない詩が考察から漏れるのは仕方がない。

ここで、次のことをもう一度注記しておく。淵明が参軍として幕僚に加わった人物がどれかについて、くいちがう二つの説があり、定説は劉裕とし、対立説は劉牢之とする。先の議論でわたしは、淵明の詩文全体の示す人柄からも一般的な処世様式からも、劉牢之説

の方が合理的であることを示した。ここではそれを前提として考えていく。いずれにしても、東晋王朝の篡奪者である劉玄や劉裕に「仕えた」とする従来の見方は、淵明の人生と詩に正対する眼を曇らせる。淵明は、彼らをそれなりに知ることができる程度に、発言を聞き表情を観察する機会を何度かもっただろう。そして遠くから、二人の権力志向者が東晋の政治を牛耳ろうとして社会が混乱していくのを観察した。その「失望の時代」が彼を隠退生活に誘導した一因でもあっただろう。しかし、詩に世情を批判する感情が伴っていないとしても、篡奪して宋王朝を建てた劉裕への非難や当てつけなどを好奇心から過分に推量して詩の解釈に混ぜ込めば、詩の気韻をそこなう。淵明は、社会を観ることをおろそかにしたのではないけれども、自分の生活に根ざして人生を見つめ、日々に観たことや心の動き、さらに思索に浮かんであらゆることを詩に詠った、世情は彼の人生と詩の主要な主題ではなかった、とわたしは思う。

1

陶淵明が転機にあった三十五歳から四十一歳までの時期の詩文の表題を、この補遺の「本文」（「蝶の雑記帳四十六」）に倣って再録しよう（アラビア数字は『全集』の順番）。

- A 三十五歳(三九九年)、詩(39)「始めて鎮軍參軍となり曲阿を経しとき作る」
- B 三十六歳(四〇〇年)、詩(40,41)「庚子の歳五月中都より還るに…」
- C 三十七歳(四〇一年)、詩(19)「斜川に遊ぶ」序に「辛丑正月五日」
- D 三十七歳(四〇一年)、詩(42)「辛丑の歳七月赴仮して江陵に還らんとして…」
- E 三十九歳(四〇三年)、詩(43,44)「癸卯の歳始春田舎に懷古す」母の喪中(二十五か月)
- F 三十九歳(四〇三年)、詩(45)「癸卯の歳の十二月中作り従弟敬遠に与う」
- G 四十一歳(四〇五年)、詩(46)「乙巳の歳三月建威參軍となり都に使いして…」
- H 四十一歳(四〇五年)、序に「職を去る、乙巳の歳十一月」

Hで隠退を表明する前のB—Gのとき、淵明は人生の岐路にあると意識し、ふりかえつてみてもそう考えたと推察できる。これらの詩に干支が明記されている理由はそれと関係しているのではないか。表題に干支が添えられているのは卷三の五言詩であり、ほかに、続き番号^{42,43}の四詩である。いずれも隠退後、四〇八年家が焼けたとき、四〇九年の重陽の節句、四一〇年と四一六年田家・田舎に住んで耕作したときの作である。歳月を意識するところがあったのだろう。

淵明の心境の推移を詩文に沿って観察するために、作品を上述べた三つの時期に分け

で考える方法を探る。しかし、干支の書かれていない詩文がいつつくられたか、たしかでないものも多い。慎重に考えていかなければならない。

2

まず、転機の時期に詠まれた詩がA・H以外にないか探そう。すると、「雑詩その九(95)」。「その十(96)」にある「東逝」・「東崖に逝く」という言葉が目を引き。詩94は、「役目で遠く東逝して、家庭での食事を想い、帰りたい」と旅愁を詠い、詩95は、「閑居して気ままにしていたのに役に駆られて車で東崖に来たら、たちまち時が過ぎ妻と離れて久しい」と郷愁を詠う。淵明が遠くへ東行した形跡は、『全集』の中で、この二詩のほかにA・BとGしか見つからない。詩94・95はいずれかの東上のおりに詠まれた可能性が高い。岩波文庫『全集』は、Aの詩を四〇四年(四十歳)の作とする(B・A・Gと三度東上したことになる)ので、詩94・95をあいまいにしか説明できていない。それよりも、Aが三九九年の作であり、この二詩がA(B)と同じ行役のときの作である蓋然性が高くと高い。なぜなら、滞在の短くないことを言う詩95は、上京とさらに京口から曲阿を経て浙江(東崖という言葉がぴったりだ)への行軍を含む三九九・四〇〇年の期間にふさわしい。詩95には「寒

「氣」や「歲月の進行」という言葉が出る。孫恩の反乱は三九九年十月に起きているから、軍事行動は冬だったはずで、淵明は軍にあって年明けを迎えただろう。この点も上の解釈を支持する。

詩35には、もう一つ重要な句「いつのまにか十載を経、しばらく人のつなぐところとなった」がある。これは、仕官しておおよそ十年経ったことを意味するだろう。ところが、詩「飲酒その十九」は、昔を回顧して、「すきを投じて仕官した、この時、立年三十歳」に向かっていた」と詠んでいるので、仕官したのは三十前である。岩波文庫『全集』はそれを二十九歳とする(二十九歳以前も排除できないだろう)。仕官してから三十六歳(四〇〇年)までを概数で十年と表現してもおかしくない。この解釈は、詩「園田の居に帰るその一」の「誤って塵網の中に落ち、一たび去って十三年」という句とよく調和する。母の喪に服して休職した期間を含めれば、任官していたのは四十一歳までのおおよそ十三年間になる。こうして、先に「本文」で議論したことが正しかったと確認される。初めて仕官したあとすぐに辞めたという『隱逸伝』の記述は作り話だったのだ。陶淵明は、モンテーニュやモンテスキューのように、一般的な人の在り方からはずれた人ではなく、高邁だが常識人として人生を生きただのである。

詩 94・95 に続く「雑詩その十一(96)」は、「我が行 未だここに遠からず」で始まる。

この三つは同じ行役のときの一連の作品と考えられる。岩波文庫版は、第五・六句に「辺雁 所無きを悲しみ、代謝して北郷に帰る」とあるのに、第三・四句「春燕応節起、高飛私塵梁」を「春燕が季節の到来に応じて、梁の塵を払って南方へ飛び立った」と解釈する。そして、結句の「春夜長し」を「秋夜」に作るべきだとする一説があると書く。しかし、ここには混乱がある。雁が北郷に帰るのは燕が現われる春である。この詩は帰郷の気持ちが強くなったことを詠うのだから、春から夏に繁殖する燕が家に帰ってきて「梁の塵を払った」と見ているのである。春燕の回帰も雁の北帰行も望郷の念をつのらせ、春夜を長く感じたのだ。結句の前の「愁人辞を為し難し」はまだいとまを告げられない愁いを言っているのではないだろうか。Bの詩は五月に詠まれている。この行役を終わりたいという希望は春も過ぎて夏になってかない、都をあとにすることができたのだ。

「雑詩」とは表題のない詩のことである。その九から十一(94・95・96)は、その八までと明らかに趣がちがう。これら三詩は、淵明の文箱に連続してあったのだと思われる。だが、A・Bの三詩(39・40・41)と同じ行旅で詠まれたとなれば、六つの詩の書きつけはもとひとつ束になっていたと考えられる。それが、『全集』に編まれたときには、A・Bの三詩はD—Gの前に置かれていたと推測できる。わたしは、詩人自らがそうしたのでは

ないかと想像する。先ほど述べたように、A—Gは、人生の画期をなすH「帰去来の辞」へとつながる転機を跡づける詩群である。淵明は、自作の詩を読み返して心境の推移を確認し、隠退後の心構えとした、と想像できる。詩39-41は、詩94-96と同じ行旅で詠まれたはずなのに、前者は後者よりも優れている。詩形が整い文も意をよく表現する。詩人はおりおり詩を推敲するものである。淵明も同じことをしたというのが大いにありそうなことだ。ひよっとすると、B—Gに干支が添えられ順番に並べられたのはそのおりではないだろうか。ただ、Aでは劉牢之の参軍だったことをあいまいにしたかったのか。

大事なことは、詩39—41と詩94—96とが思想において違いがあることである。後者で旅愁や望郷にとどまっていたものが、前者では人生行路についての思索に深まり、心持が変化し始めたことを示す。この点も推敲があったことを示唆する。長旅から帰って心境の転換が明瞭になってきたのだろう。年齢的にもそういう時期にさしかかっていた。

詩と心境の進歩を記念する作品が、辛丑(四〇一年)三十七歳のCの詩(19)「斜川に遊ぶ」である。このすばらしい詩については、「本文」の注1で、鑑賞しながら、四〇一年にくられたとするのが妥当であることを論じた。『全集』でCがBとDのあいだに置かれなかった理由は説明がつく。この詩は二、三の隣曲と舟遊びをしたときに詠まれたもので、

同行者は、それぞれ詩を詠み年齢・出身地などを記し年月と日付まで書いた。それは書き写され、淵明もほかの人たちもそれを記念に手元にもったはずだ。たぶん、それらは束ねられるかなにかして文箱に入れられていたが、淵明はほかの人も持っている自作の詩を推敲することはなかった、むしろこの詩は、小舟から見る臨場感が情景を融合し、同行者に示すためにも十分に練られて完成度が高かったのだと考えられる。この詩が響かせる情感は、「帰去来の辞」以後の心構えの変化した詩に比べて強い、とわたしは感じる。

詩19のあとには、主に官職名のある人との応答詩が続く。その中の詩26「五月旦作、戴主簿に和す」には、日付が入っている。詩中に「星紀」という言葉があり、丑年につくられたことを示す。岩波文庫版は、これを四一三年四十九歳の作とするのが妥当だと書くが、理由は書いてない。ところがこの詩は、「虚舟逸掉にまかせ、回復ついに窮り無し、発歳始めて俯仰し、星紀たちまち将になかばならんとす、…、既に来たるたれか去らざらん、人の理もとより終りあり…」と詠う。わたしには、この詩が、辛丑正月五日の「開歳たちまち五日」で始まる斜川の舟遊びでの詩と、語句の対応があり趣旨がとても似ているように聞こえる。これは正月の詩の変奏曲ではないか。未詳とされる戴主簿は斜川に同行した江陵州府の同僚で、淵明が休暇をとる前後に挨拶文をよこしたので、前の詩の内容を知っている人への応答詩として書かれたのではないか、と想像がふくらむ。

もう少し、三十五歳から四十一歳までの転機の時期の詩を、岩波文庫『全集』に沿って見ていこう。

巻頭卷一の四言詩(1.23)「停雲」・「時運」・「榮木」は連作だろう。詩②「榮木」が、序に「將に老いんとするをおもう」や「白首」、句中に「四十にして聞こゆるなくんば」とあるから、岩波文庫の言うように四十ころの作、それも四十歳を前にしての心持ちが出ているように見える。目にするものを落ち着いて見つめて考え深い作品だと思う。母の喪に服して行動を控えている時期だろうか、淵明は、四言の古詩に学びながら詩境を開拓しつつあったと思われる。Fの詩⑤に、「千載の書を歴覽」とあるのも、思索を深めていたことを証言する。四言詩①「勸農」も同じ時期の作か。ゆくゆく退職して農に就こうとする気持ちを醸成している段階と考えられる。この詩には修得した教養を知的に働かせるところが見える。歴史的な制約を超えてはいないけれど、陶淵明は知的なのだ。

七言詩③①・③②「郭主簿に和す」も同じころの作と推定されている。「交わりをやめて閑業に遊び」や「いささか冠を止める。ピンを忘れる」の句が、職務を離れてまもないこと

を言つて、それを示唆する。詩_二が漢字は異なるが四言詩と同じく「あいあいたり」で始まることも、同じ時期とすれば理解しやすい。これらの詩から、町中から離れた家で、田園での生活を初めてゆつくりと味わっているようすがうかがわれる。それを詩句に表現する楽しみも深まりつつある。

詩₃₁・₃₂の前には、「劉柴桑に和す」(29)と「劉柴桑に酬ゆ」(30)がある。劉柴桑(劉程之)は、淵明の本拠の地柴桑の県令だったが、のちに隱棲し、淵明と共に「潯陽の三隱」と称せられた人という。この詩で、(あなたに)隱棲を誘われたが、家族を気づかて言い出せないでいると答えている。詩_三・_{三三}と同じ時期の作品だろう。田園の暮らしをこまやかに詠い、淵明がしばしば用いる「百年の外」という言葉が出る。人生の後半期に思いを致しているのである。知人への応答詩にはつきりとは語られないが、心中にそれを構想していたのだろう。岩波文庫は、詩_三に出る「弱女は男にあらずといえども、情を慰むることまことに無きに勝る」の句を、娘しかいない相手をいたわっているとする説を紹介しているが、詩_{三〇}にも「童弱」が出るから、自分の幼い子への慈しみを言っていると解釈すべきだと思う。詩_{三二}でも「弱子は我がかたわらに戯れ」と詠むこととあわせて、このころにはまだ成人には遠い子がいたのである。五言詩の末尾あたりに離れてある詩_四

「子を責む」も、十六歳の長男から九歳の末っ子まで五人の男児のことを、ユーモラスにしかし親の気がかりをこめて詠う。この詩も、転機の時期（もしかしたら隠退前後）のころの作だろう。「帰去来の辞」の序にも「幼稚室に盈（み）つ」という言葉が出る。

これまで淵明を清貧な隠逸の士としてステレオタイプにとらえてきた人たちに欠けていたのは、彼の生活を具体的に考えてみることであった。陶淵明は、思索し、詩作しながら、これからの生き方を模索していたが、性に合わない役所勤めを簡単に辞められない事情をもっていたのである。内心の葛藤は強くなっていたと推察できる。堰を切ったようにあふれ出る「帰去来今の辞」は準備中であつた。

4

わたしは淵明のもっと若いときの詩を知りたい。ところが、制作年がよく分からない詩が二、三あるものの、岩波文庫版が推定するように、残りは全部隠退後の作と考えられる。転機の時期よりも以前の詩であることが確かなのは、四言詩∞「子に命（なづ）く」だけである。長男が生まれて八年ぐらい経つてつくられている。だれしも、子に命名の由来や父祖のことを語るときには、改まった調子になる。昔の人がそれを詩に詠むとすれば、いつ

そうかしこまって伝統の語り口に似るだろう。この詩だけでは、淵明が若いころどんな詩をつくっていたかはよく分からない。もちろん彼は、教養としてまた交際文としても詩を学んだだろう。のちの詩文から見ても、詩を試みていたと考えられる。しかし残念ながら、詩人は、初期の作品を残すほどのものと考えなかったのか、彼の文箱に保存しなかったようだ。あるいは、「命子」をつくったころから本格的に詩を詠むようになったのか。

5

「歸去來兮の辞」は年が明けて四〇六年初めに完成したのだろう。序の散文は、淵明の事情と心持ちを詩よりも率直に明かす。ここでも家の貧しさを言うが、「公田の利は酒をつくるに足りた」と氣どるゆとりがある。ここから彼の新たな生活が始まる。先々五人の息子たちの身が立つようにし娘たちを嫁がせなければならぬから、給料が入らなくなった分の収入を増やす算段を立てたようだ。壮年まで農事に直接かわらなかったが(詩43)、母の喪中に耕作の研修をしたので(詩43,44)、隠退してから、実入りを増やすために自身も耕作に従事することにした。それが詩14-18「園田の居に帰る」に詠まれている(もちろんこれらの詩の真価は田園の環境と生活の詠いぶりにあるのだけれども)。ここで、詩14

の中の「荒を南野の際に開こうとする」が注目に値する。日本でいう小作地も所有していただろうが、使用人を使つての耕作地を拡大する努力が行なわれたと考えられる。しかし、淵明の農作業は、経済的な理由だけでなく、人生が老年に向かうことを考量した上での生き方の選択だったと考えるべきかもしれない。それが彼独自の隠逸だった、と。

引退後の生活は、⁴¹から⁴⁶までの詩にうかがうことができる。その生活は、家が火事に遭い、成人した子供たちに身を立てさせるなどするうちに、ゆとりを失っていったのだろう。その地方一帯が凶作に見舞われれば、米びつの米が尽きることも起きただろう。しかし陶家は、父方母方ともそれなりの一族だったから、飢えて死ぬことはない。陶淵明は、その暮らしに慣れていく。生活を詩に詠み、酒を飲みながら、昔を回顧し、今を楽しむ。詩境はしだいに深まり、さまざまなことを自在に詠うようになった。人生について考える雑詩86-93が、思索の深かったことを教える。「飲酒」二十首(52-71)、「止酒」(72)、「述酒」(73)は、酒好きの気の利いた酔歌のようである。下戸が言うのもおかしいけれど、生活を味わっているその詩はじつに極上の銘酒の数々である。下戸さえ酌みたくなる。

知と情の合金のような陶淵明は、ゲーテの言う意味の広い詩人・文学者であった。作品数は少ないがその詩文は、中国の文人として広範にわたる。書物を読んでも、それに促さ

れて詩を賦し文章を書いた。自分の手本とすべき清貧の士や心を動かされた人、刺客荊軻のことまで詩に詠む。興味尽きない『史記』などを手にすれば、それは制止できない。『山海經』のような神話伝説まで題材になる。そして自ら、フィクションに手を染めた。知の技の冴えた「閑情の賦」を白璧の微瑕と言う人は、自由な詩情を束縛すれば、「桃花源の記」を手にすることができなかったかもしれないことを恐れるべきだった。蘇東坡や魯迅が陶淵明の詩文を称揚するのは、単に資質が似ていたからだけではない。

むすび

大部分隠退後の作品である陶淵明の詩文をもっと鑑賞しながら観ていくつもりだったのに、足早に通り過ぎてしまった。紙幅も尽きた。わたしは、同様の失望の時代を見ながら淵明の寿命をだいぶ超えてしまったけれど、文明の得失の得の方のおかげでもうしばらく天命を楽しむことができそうだから、ゆつくりと詩人の歌を聴くことにしよう。

松枝茂夫・和田武司訳注の岩波文庫『陶淵明全集』と石川忠久著『陶淵明とその時代』に導かれて、わずかに新しい知見を得た。先学の考究のおかげで、敬愛する陶淵明にいつそう近づけたことを喜んでいる。

